

高品質で美味しい 富山米を 消費者の皆様のもとへ

ほおばる幸せ。富山米



「適期刈取り・胴割米発生防止運動」実施中！

昨年は、白未熟粒の他、**胴割米が多発**。
胴割米の2年連続の多発生は、富山米の
評価を著しく低下させます。
**暑さに負けない稲体づくり、
収穫・乾燥作業の周到な準備をして
実りの秋を向かえましょう！**



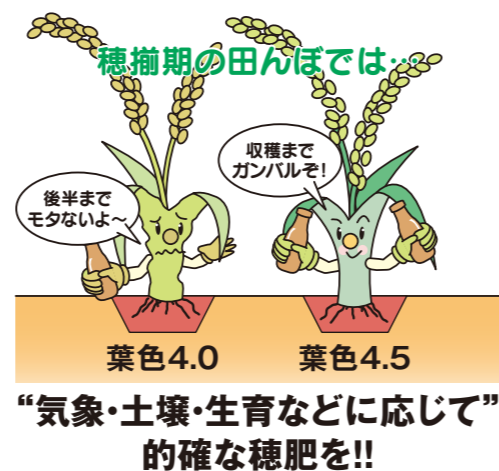
胴割米

「高品質・良食味な米づくり」のラストスパート!!

～1等米比率90%以上を目指して～

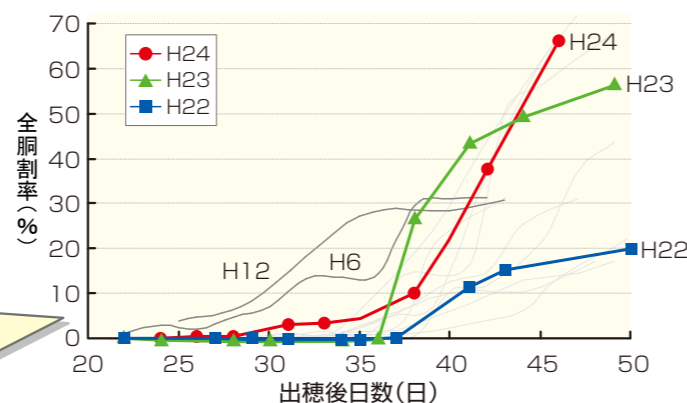
1 穂揃期の葉色確保による稲体活力の維持!

- 穂揃期の葉色を4.2～4.5(砂壤土では4.5)に誘導し、登熟期間の稲体活力を維持
- 分施肥栽培では、1回目の穂肥は的確に、2回目の穂肥は確実に施用
- 肥効調節型基肥でも、出穂7日前に葉色3.8(砂壤土では4.0)以下の場合、窒素成分で0.7～1.0kg/10a施用



2 出穂から20日間は水を切らさずに!

- 出穂から20日間は、湛水管理
- 収穫5～7日前まで間断かん水を行い、適正な土壌水分を保持
- フェーンが予想される場合は、事前に入水



近年の胴割米は、
登熟期後半に発生!
穂揃期の葉色維持、
適切な水管理
で発生を防止しましょう!

3 カメムシ防除は確実に!

- 穂揃期の防除は遅れずに(出穂後3～5日目を目安)
- 「てんたかく」など早生は、穂揃期と傾穂期の2回防除を実施
- 防除後も密度が高い場合は追加防除を
- 防除間隔は7日を目安に(間隔が長くならないように注意)



4 適期刈取りで胴割米発生防止!

- 気温の推移が平年並みの場合は、積算温度1000～1050℃、籾黄化率85～90%で適期刈取り
- 高温年は、積算温度950℃、黄化率80%で刈り始め

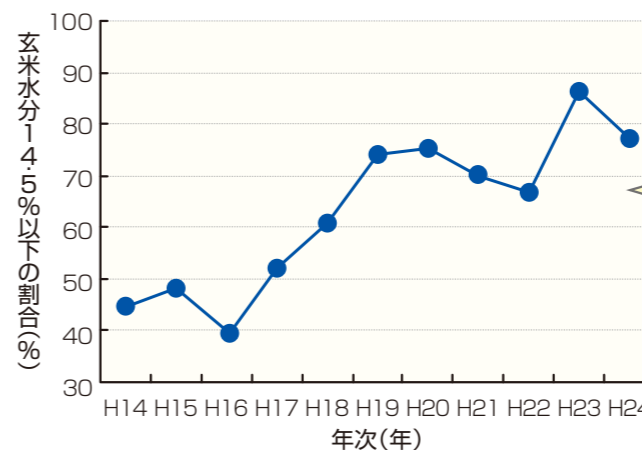


適期刈取り・胴割米発生防止運動実施中!

- ※ 高温により収穫時期が早まっても対応できるよう、今から周到な準備を
- ※ 計画的な収穫で胴割米の発生を防止しましょう!

5 適切な乾燥調製

- 毎時乾減率0.8%以下での乾燥
 - 立毛胴割れが多い場合は送風温度を下げる
 - 乾燥機を更新した場合は送風温度に注意する
- 玄米の仕上水分14.5～15.0%の徹底
- 1.9mmふるい目の使用で選別を徹底
- 施設や設備の点検・清掃を徹底して、異品種・異物の混入を防止



過乾燥が増加しています。
過乾燥や急激な乾燥では、
米が砕け、品質、食味が
低下します。

<参考> 仕上水分の目標値の変化

年次	目標水分(%)
H14～16	15.0
H17～	14.5～15.0

消費者の心をつかむ富山米のブランド化を!

信頼される安全な米づくり

- 消費者に選ばれる富山米を安全に生産するため、「とやまGAP」に取り組みましょう。

まずは、自己点検!

次回までに
×がついたところを
改善しよう。

『とやまGAP(ギャップ)』とは

富山県では、**富山県適正農業規範**に基づく適正な農業生産活動の実践を「とやまGAP」と称し、その取組みを推進しています。

まずは、「とやまGAP自己点検シート」を活用して自らの農場における不適切な行為や状態である「BAP(バップ)」がないか点検し、それらの改善に努めましょう。



とやまGAP自己点検シート		点検結果
1: 『ほ場の位置・環境に備える設備の作成』 <安全> 重要		
(A) ほ場の位置・環境に備える設備の作成が完了している。	○	
(B) ほ場の位置・環境に備える設備の作成が完了していない。	△	ほ場の位置・環境に備える設備の作成が完了していない。
(C) ほ場の位置・環境に備える設備の作成が完了していない。	×	ほ場の位置・環境に備える設備の作成が完了していない。

とやまGAP自己点検シート

<とやまGAPの目的と取組例>

【安全な農産物の生産】

農薬・肥料の適正な使用や管理、生産履歴記帳 など

【環境の保全】

廃棄物の適正処理、農薬散布後の1週間止水管理 など

【農業者の安全確保】

危険箇所の把握、機械の点検・整備、保護具の着用 など

● 秋の農作業安全運動「8月20日~10月20日」 ●

- 秋の農繁期には、コンバインによる事故が毎年多く発生します。農業経営の維持・安定のためにも、農作業中の事故防止対策を徹底しましょう。

- 万一の事故に備え、労災保険に加入する
- 巻き込まれにくい服装を着用する
- コンバインの詰まりを取り除く時は、必ずエンジンを切る
- 手こぎ作業時は、手こぎ位置や足場を安定化させる



土づくりの推進

① 土づくり資材の散布

- 土づくり資材は毎年継続的に施用することが重要です。
- ケイ酸分の補給により、葉や根が丈夫になり、病気や倒伏に強い稲体を作ります。

② 有機物の施用

- 稲わら、糞がらは焼却せずにすき込みましょう。
- たい肥や発酵鶏ふんを積極的に施用しましょう。
- たい肥の確保が困難な場合は緑肥作物の栽培をおススメします。(大豆前のヘアリーベッチ、大麦あとのクロタラリアなど)

③ 深耕の実施

- 秋耕と春耕の2回掛けで、15cm以上の作土深を確保しましょう。
- 秋耕後は排水溝を設け、水はけを良くし、稲わらなどの腐熟を促しましょう。

